

会報

第22号

編集・発行人 支部長 浅子 逸男

『万葉秀歌』と会津八一

浅子 逸男

学生時代、斎藤茂吉の『万葉秀歌』(岩波新書)は端座して読むべきものだとか会津八一が言ったと聞いたことがあった。これはかなり知られた話だったようである。

京都にある大学に就職して何年かたつたころ、入学式だか何だかの式で、壇上で挨拶した理事長だったか何らかのエラいさんが、早稲田の学生だったとき、夏休み帰省先から帰ったところ会津八一に「この夏何を読んだか」と聞かれ、列車の中で『万葉秀歌』を読みました」と答えたところ、列車の中で読んだとは、お前は足を投げ出してあの本を読んだのか」とたいへんな調

子で怒られたという話をした。私が学生時代に耳にした話はこういう流れで出てきたことであった。

昨今、大学も経営が難しくなり、また文部科学省の締めつけやら結果を出せなどという成果主義の風にさらされ、文系学問が虐待されている。

私が着任して間もないころは、学問への畏敬と先達に対する敬意が間違いなく伝えられていたのだ。この思いだけは忘れてはならない。

る。ただ、本企画は、埋もれた対象の発掘作業に終始するものではない。その狙いには、自らの居るこの「関西」という場所自体を批評的に問い直し、既成の史的枠組みや知識で捉えられてきた関西における文芸文化の姿を再考することを含んでいる。これまでの認識に揺さぶりをかけるような「**糞**」なる関西」を探求することで、新しい文学観や地勢図が開かれるかもしれない。

その検討に際し、ひとまず中心とするのは、1920・30年代である。

この時期、大規模な経済的、社会的変動を背景としてモダン文化が勃興したことはよく知られているが、関西ではどのような動きがあったのだろうか。

たとえば、佐藤春夫や稲垣足穂と関係の深い神戸の詩人、石野重道。彼ほどのようなメディアに自身の作品を発表し、また、いかなるネットワークの中で活動していたのか。そして、彼

支部大会案内

一〇一五年度 秋季大会 於・大阪大学豊中キャンパス
一月七日(土) 午後二時より

プログラム

開会の辞

大阪大学大学院文学研究科教授

出原 隆俊

シンポジウム

「**糞**」なる関西—1920・30年代を中心として—

趣旨説明

司会 高木 彬
山田 哲久

報告

一九二〇年代～三〇年代の

大阪文化・文学研究

— 天阪時事新報 文芸欄 —

を視座として—

増田 周子

昭和初期・神戸の文学青年、及川英雄

— 文学における中央と地方

大東 和重

熊野新宮—天逆事件—

春夫から健次へ

辻本 雄一

デイスカッサント

山口 直孝

質疑および全体討議

閉会の辞

支部長 浅子 逸男

連続企画 第二回)

シンポジウム

「**糞**」なる関西—1920・30年代を中心として—

趣旨

本企画は、関西の文芸文化の中でこれまで必ずしも光が当てられてこなかった対象——人・風土・メディアなど——を新たに考察・評価する試みであ

その周囲の表現者たち)を創作へと駆り立てたエネルギーとは、いかなる強度と広がりを持つものであったのか。——一つの事象を核として明らかにされていく、まだ知られていない関西文芸文化の側面は、他にも多くあるだろう。

また、この時代の前後に、その検討対象を準備／継承／更新したものがあ
るのならば、それも議論の範囲に含め
てもよいだろう。関西」を軸に、既成
の枠組みを問い直すダイナミズムやド
ラマを擲い上げることで、関西」自
体が内と外との双方に対して、その『
なる相貌を現すことを企図している。

支部内外からの様々なアプローチに
よって、新しい知見が議論を通して得
られることを期待している。

発表要旨

一九二〇年代～三〇年代の

大阪文化・文学研究

—— 天阪時事新報 文芸欄』

を視座として――

増田 周子

大阪市は、大正一四（一九二五）年
四月一日、東西南北の四区に周辺地域
を合併し、東京市を抜き、世界第六、
日本第一の巨大都市となった。天大
阪」時代の到来である。大正一二（一
九二三）年の関東大震災で東京が大打
撃を受け、谷崎潤一郎ら有力作家が関
西に移住し、関西にとつては文化発展
の絶好のチャンスであった。天大阪」
時代前後は、カフェサロンに集まった
人々が担った文化活動も発展し、活気
づいた大阪の様子が見られ華やかであ
る。一方、昭和金融恐慌の時期とも重
なり、失業者も増え、厳しい面も見ら

れる。すなわち、モダニズム文学の隆
盛の一方で、社会主義文学も発展して
いく状況下なのである。これら、天大
阪」時代周辺の大阪文化や文学——人・
風土・メディア——とはどのようなもの
であり、作家達を創作へと駆り立てた
エネルギーとは、いかなる文化強度に
支えられていたのであるか。本発表
では、これまでほとんど取り上げられ
てこなかった天阪時事新報 文芸欄』
をもとに、その他のメディアでの文化
活動も視野に入れ、広く大阪文化やメ
ディア作家を見渡し、興味深い点を拾
い上げて考察していきたい。当時の大
阪文化を見直すことで「糞なる関西」
の諸相を探求することを目的とする。

昭和初期・神戸の文学青年、

及川英雄

——文学における中央と地方

大東 和重

近代日本において「文壇」と呼ばれ
るものは東京にあった。しかし地方都
市にも、規模は異なるが文学愛好者た
ちのつながりがあり、文学活動が行わ
れていた。ことに高等教育機関の整備
が進み、同人雑誌が盛んに刊行される
一九二〇年代以降、中央からの刺激を
受けつつ、各地で無数の文学青年たち
が活動した。

本報告では、昭和初期の神戸で、公
務員として働く傍ら文学への情熱を燃
やし、東京の雑誌や同人雑誌にも関わ
った、及川英雄（一九〇七―七五年）
の活動の輪郭を描きつつ、関西の港町
にあって創作することの意味を考えて
みたい。及川英雄は関西学院大学神学
部を中退後、同人雑誌などで文筆活動
に励むも、「貫して神戸に住み、衛生・
福祉行政を中心に県庁勤務を四十年間
続けた。戦後は神戸の文化人サークル
「平どんの会」の世話役として兵庫文
化界の中心人物の一人となった。

昭和初期の神戸の文学については、
林喜芳『神戸文芸雑兵物語』や足立巻
一『親友記』など当事者の回想以外に、
宮崎修二郎の労作『神戸文学史夜話』
高橋輝次の『関西古本探検』など「連
の古本エッセイ、さらに詩人の季村敏
夫による、無名であることにこだわっ
た渾身の考証、『田上の蜘蛛』『窓の微
風』がある。これら、神戸の詩人や作
家たちへの深い愛情と哀悼に満ちた書
物に導かれつつ、昭和初期・神戸の文
学の一端を、及川を通して眺めてみた
い。

熊野新宮——天逆事件」——

春夫から健次へ

辻本 雄一

紀伊半島の先端近く、ひとつの町・
熊野新宮の近代の歩みが、日本近代」
の縮図として映らないか——そんな天
風呂敷」。

開明的、進取の精神が、反骨の精神
と相まって、人々を捉える、そこに天
逆事件」の衝撃。外から訪れてくる人
たちによって談論風発した町が、恐懼
せる町」に変貌、ふるさとから上京し
た人たちは、モダニズムと出合う、天
逆事件」の翳りをどこかで引き摺りな
がら。佐藤春夫から中上健次へ、近代
の文学」といわれた時代を駆け抜けた
この町出身の文学者たち。

「中上文学」の登場は、あらためて熊
野」と言う場を、普遍的な場として意
識させ、内在的に「熊野」の磁場を問
いかけることになった。中上文学」の
課題「路地解体」は、わが国の国土解
体の象徴では。

一九二〇―三〇年代というかたちで、
絞りきれないかもしれないが、断片的、
大まかすぎると自覚しつつ、幾つかの
エピソードを辿ってみたい。天風呂敷」
に似合わない些末なことに終始するの
ではないかとの危惧を抱きながら。

大会発表を終えて

徳富蘆花「灰燼」と 沓郷隆盛

平石 岳

まずは、修士論文も書いていないような若造の私に、発表の場を与えてくださったことに感謝したい。発表では、明治三〇年代前半に「沓郷隆盛」を語ることに、扱うことの複雑な様相を、徳富蘆花「灰燼」を手がかりにして考察した。発表の過程で、いわゆる「王野の西郷さん」に触れた。蓄積された「沓郷」というアイコンが、銅像という実像になる場合に起こった小騒動を確認し

たが、やはり、沓郷と関連の資料に重心を置きすぎてしまったように思う。そのため、「灰燼」という作品を、上野西郷像をめぐるって発現した「英雄」認識との差異としてしか読むことができなかつた。その不足点は、席上でご質問していただいたことに如実にあらわれていた。

初出メディア「国民新聞」と「灰燼」の方向性は本当に異なっているのか、初出—初刊の異同とエピソードによる読みコード化を、どのように取り扱うべきなのか、といったご質問が出たのは、人口に膾炙した「自然と人生」版ではなく、なぜ「国民新聞」初出本文を読むのかという問題を、私が充分

に説明することができなかったためである。現段階でも明確にお答えすることはできないが、少しだけ補足する。

「国民新聞」で蘇峰が行った、自らの欲望を「沓郷」に託していくようなやり方を、ある種露骨な形で明らかにしたのが「灰燼」であった、と考える。まだ推論に過ぎないが、「沓郷」の唱えた征韓論を参照しながら、蘇峰の「変節」が語られていったことも考えられる。いずれにしても、「国民新聞」と同時期の、他メディアの論調を差異化することが、大きな課題として残った。

また、発表の後に、「英雄」という言葉について、貴重なご教示を受けた。例えば、蘆花の同僚・山路愛山に向けられた、北村透谷「入生に相渉るとは何の謂ぞ」にも見られるように、「英雄」の内面、精神に目を向けるべきという言葉説が、この時期に増加していたので

はないか、というものである。確かにその通りで、明治三〇年代には、「英雄」という言葉が、現在とは違う文脈で語られていたことも考えなくてはならない。

発表内外で貴重なご意見を賜ることができたが、今回の発表ができたのも、多くの先生・先輩方の温かくも厳しいご指導があったためである。ありがとうございます。そして、同志社から東京に飛び出していった二人の兄弟が、文学にどう関わっていったのかを、もうしばらく同志社から追跡していきたいと思う。

覃枕

— オフェリヤの合掌を中心に

原田 のぞみ

「覃枕」の画工は、そのときの感興や、洋画家としての態度について、様々な「西洋」と「東洋」を引用しつつ思索を巡らせてゆく。そのうちでは、「西洋」と「東洋」の比較対照が行われている箇所も多々ある。人事が根本となっている「西洋の詩」に対し、その境を解脱している「東洋の詩歌」(一)、具象世界を描く「泰西の画家」に対し、物外の神韻を描いた「芬与可」「雲谷門下」「大雅堂」「蕪村」ら東洋画家(六)。西洋の食物」に対して「日本の献立」の色の好き、西洋の菓子」に対して「羊羹」が一個の美術品であること(四)を謳った箇所もある。見方によれば、

画工は「西洋」の芸術に比して、「東洋」の芸術を高唱しているようにも取れるだろう。

しかし他方、画工が描こうとする絵においては、比較とはまた異なる、翻訳といえる「西洋」受容の形も表れている。「ミレー」のかいた、「オフェリヤ」のオランズは「吾掌」と翻訳され、そのキリスト教的魂の救済のイメージは、仏教的「往生」イメージへと変換されている。画工は、比較対照によって「西洋」と「東洋」を並置して、「西洋」を批判し「東洋」を称揚するだけではない。むしろ、「西洋」の画題を、「東洋」もしくは自身の「精神」や「興味」の画題へと作り変えようともしている。「覃枕」で展開されているのは、画工による「西洋」と「東洋」の単純な二項対立というよりは、「西洋」を「東洋」の人間である画工がどう受容するかと

いう問題ではないか。

そもそも西洋画家である画工は、西洋に通じながらも、その「精神」や「興味」は「西洋」にないという点で分裂を抱えている。「西洋画」を学び、「西洋」の芸術の知識を身に付けたからといって、ミレイのような西洋画家と同質の「精神」や「興味」(七)を、画工が持ち得るわけではなかった。しかし、観海寺の和尚がいう「南宗派」(八)のごとき東洋画ではなく、あくまで「西洋画」を描く画工は、ミレイ「オフィーリア」という「西洋」を風流な土左衛門「七」という「東洋」に翻訳することで、画題の成就を図っている。となると、神の知らぬ情で、しかも神に尤も近き人間の情「中」とされ、多くある情緒のうち「から発見された「憐れと云う字」もまた「西洋」の翻訳であり、画工によるキリスト教

的概念の訳語なのではないかと考えられる。

文章世界」の小説指導

山本 歩

田山花袋ならびに雑誌「文章世界」の研究として、懸賞小説の選評と、懸賞小説傑作選『「十一篇」』を取り扱った。企図としては、花袋が誌上に形成したりテラシーを問うことであり、そのために『「十一篇」』収録作品の傾向と選評を整理した。

第一に、題材を有効に扱えなかった憾みが残る。とりわけ『「十一篇」』の収録作本文、作者(↑投書家)たち個々について、具体的なところを紹介できなかったのは残念だ。水野仙子、秦豊

吉、西村陽吉らに加え、今日無名な皆川行人、上田良一と、言及したい名前は多い。また、質疑においても問われたことだが、個々の投書家の作風の変遷は、指導の影響に紐付けできよう。論文化する際、取り入れたい部分である。

質疑で中心となったのは「ローカル・カラー」(地方特色)という語。改めて述べておけば、花袋は「カラー」(個性)の概念を地域性に限定した「ローカル・カラー」を小説指導に盛り込んだ。諸地域の気候・人間性・言語的特徴を指し、自然主義的「観察描写」の対象となるものだ。「地方」にしか見出せないものではなく、東京でも地域別区画ごとに「カラー」があるのだとされる。ただし発表においては、この後、花袋によって「一般化される」投書家「地方青年」というイメージに、話

題を移行させてしまった。このため、

「ローカル・カラー」の定義に都市部の地域が含まれる点を、棚上げする形となった。そもそも「都会/地方」の二分法は、ローカリティ||「地域性」という単純な語義を見え難くする。指導内容から「文章世界の誘引力」を導き出す、論の運び方に問題があったと言える。

「ローカル・カラー」に関しては、発表後にも様々に示唆をいただいた。都/会/地方に二分するものではなく、各地域を記号化する営みが「ローカル・カラー」の発見だったのかも知れない。「小説指導」という枠組みから考えれば、花袋の「二連の指導は、そうした記号化の教授として見ることもできよう。」

些か使い古されたタームに拘り過ぎた、というのも反省点だろう。無論、

花袋研究史に位置付けを見つげる上で踏まえるべき事項はある。しかし同時に、(小説指導)という枠組みの中で、花袋・自然主義・文章世界」に対する、既存の論じ方を、どのように組み替えていけるか、そうした課題設定も必要だろう。

「小説指導」あるいは作家志望者を取り巻いた状況、このようなテーマへの興味は尽きない。今日、アマチュアの小説発表はウェブ上に舞台を移し、

「指導」などという中心は失われたかに見える。しかし依然、小説家への誘惑や、小説家になれる「を思い込ませる」機構の存在は変わらない。試みに最大手サイト「小説家になろう」を覗けば、掲載作は三二万内外、登録者はのべ人数で六〇万人に達している。こうした現況に至る指導と誘惑の歴史を問いたいと、過大な課題を言うだけだ

タならば言うておいて、今後の指針としたい。

発表の機会を与えてくださった委員の先生方に、また当日ご清聴いただいた皆様方に、この場を借りてお礼申し上げたい。お声かけ下さった先生方の多さと、そのご教示にも励まされた。

この経験を、今後活かしたい。

太宰治「きりぎりす」の一考察

山田 佳奈

発表に際して、予め提出していた副題を変更し、要旨については若干の違いが生じたことをまずお詫びしたい。変更後の副題は「背骨にしま」われたかつての自分」、要旨は後述の通りである。

発表では、先行研究が 矢を通して 妻の語りを解釈していることを問題視し、妻の妻による妻のための語り」という観点から「きりぎりす」を再検討した。そこで明らかになったことは、妻の「成長」が夫との別れを決意させ、矢を封印するまでの物語」を語ることで、妻が「成長」した自分を刻みつけ、新たな道を歩もうとしたことである。妻は、徐々に膨れ上がる不満を語

を、この場を借りて、改めて感謝申し上げたい。この幸運を生かせるように、私なりに精進していきたいと思う。

中島敦 甬島譚》考

杉岡 歩美

発表当日は、六月というのに、ひどく蒸し暑かったことを覚えている。そんな中、沢山の方にお越し頂けたことに、まず感謝申し上げたいと思う。

今回の発表では、中島敦の「甬島譚」を取り上げた。中島は自身の「南洋行」体験のあと、「南洋もの」として「甬島譚」との総題のもとで「幸福」「夫婦」「鶏」の三篇を発表している。これらを「幸福」と「病」というキーワードで読み解くことを発表の中心とし

りに潜ませながら、最後に、別れの決定打となった出来事と、実行に移す理想を体現した有名な岡井先生と出会って、夫の矮小さを確信したこと。それはまた、妻が人を見る目を養ったことを示しており、別れの要因が妻の「成長」にあったことを意味する。また、別れを実行に移す決意は、「おろぎ」と「きりぎりす」の転位に表われており、それこそが、夫への未練を抱えた「かつての自分」を「背骨にしま」うことであった。以上を踏まえて、妻は「成長」の物語を編み、語ることで、過去に決着をつけて新たな道を歩もうとしたのだと論じた。

当日の質疑応答や懇親会の場では、「成長」という言葉が適切か否かについて、最も多くのご意見をいただいた。大変ありがたく、発表を見直すための

それでは、この場をお借りして、会場内外で頂いた多くの質疑を踏まえ、今後の課題などを述べさせていただきたいと思う。

まず、「島民の幸福」は「教育」によって行われるといった言説を挙げたが、質問にもあったように、中島の「幸福」に描かれた「幸福」はそれだけではない。「列子」との関係や、「足るべきであろう。今回の発表では、それらのことは充分になしえなかった。また、「南洋」の「幸福」や「病」に関する多くの資料を用いたことよって、逆に、作品自体の面白さが掬い取れなくなったのではないかと、この指摘を受けた。確かに、共通キーワードを押し出すことで、ひとつひとつの作品の「読み」を簡素化してしまっ

指針を与えていただいたと感じている。この問題は、夫に対する妻の未練をどのように解釈するかという問題と強く結びつく。確かに、妻が完全に夫への未練を断ち切ったかどうかは断定できない。しかし、整理された語りの内容、「きりぎりす」を「しま」という展開と、それを強調するタイトル「きりぎりす」は、内実を問うことよりも、未練」を「かつての自分」の心境にしようとする努力に主眼を置いているように思えてならない。また、「成長」は太宰研究になじまないキーワードであるからこそ、あえて主張する価値があると考えている。今後、更に検討していきたい。

学部時代から、関西支部は憧れの場所であった。そのような場で発表する機会を与えていただいたこと、そして、多くの方からご指導を賜りましたこと

うに思う。これらの点に関しては、今回の発表目的そのものが関係している。「幸福」「夫婦」「鶏」、それぞれではなく、「甬島譚」としての意味を考察したかったからだ。ただ、このことが結果的に、「読み」を狭めてしまったのも事実であろう。この問題をどう扱い、どう論じていくか、今後の課題としたい。

それから、発表を終えたあと、中島敦のメインはやらないのか」とのご意見を頂いた。多くの教科書に掲載された「日月記」の作者である中島敦は、中国もの」と結び付けられ、語られることが多い。もちろん、そのことに異議を申し立てる予定はない。しかし、中島の「南洋もの」も「メイン」たる資格はあるのではないかと、これからの「南洋もの」を問い直していきたい。

今回、発表の機会をいただき、その

場での応答を通して、一人では出来ない、発表だからこそ出来る思考の発展が少しでも出来たと思う。質問をお寄せくださった先生方、発表の場をお与え頂いた運営委員の皆様、会場校の方々、それから、ご静聴いただいたすべての方に、深く謝意を表したい。ありがとうございます。

大会印象記

前半

武田 悠希

二〇一五年度春季大会は、六月六日土、武庫川女子大学にて開催された。以下、自由発表五本のうち、前半三本の発表の印象を記す。

平石岳氏の「徳富蘆花 灰燼」と「西郷隆盛」は、これまで注目されてこなかった、同時代メディアにおける西郷隆盛の語られ方との関係性を検証した。西郷言説に見られる「英雄」認識を多数の資料から実証したうえで、「灰燼」冒頭では「英雄」像と異なる西郷や茂の姿が描かれていることを指摘し、作品とメディア言説との懸隔も拾い上げた点に、誠実さが見られた。会場との

質疑応答では、「国民新聞」の論調に対する「灰燼」の位置づけが問われた。

発表者からは、上野西郷像が注目される時期に西郷に従った者の悲劇を描く点で、特殊な位置が確認できるのではとの応答があった。一方で、「灰燼」は、西郷を語る背景に帝国主義的欲望を持つ「国民新聞」と同じ枠組み内にあるという見解も発表者から出た。この点に関してエピグラフには世俗的な価値観とは異なる視点で読まれることへの期待が示唆されているのではとの質問もあった。個人的には他に、猛が裏切られるという「世間」や「村」の言葉についてなど、さらに分析を行うことで「灰燼」の位置づけがより明確になるのではないかと思われた。今後の進展が期待できる発表であった。

原田のぞみ氏の「彈枕」―オフエリヤの合掌を中心に」は、漱石がJ・E・

ミレイ オフィーリア」を取り入れつつ用いた「合掌」という語が、漱石による記憶の誤りなどではなく、ミレイが「ハムレット」から読み取った讚美歌のイメージをオランズという宗教的な祈りの姿として描き、それを踏まえた漱石が東洋的イメージの「合掌」として翻訳したものであるという可能性を、絵画資料を用いて提示した点が興味深かった。後半の論証は、「鏡が池」の描写を介して、ミレイ オフィーリア」に画工が感じていた「不愉快」が、「美しい感じが読者の頭に残りさえすればよい」として書かれたという「草枕」に、心ならずも表出した様子を呈示しようと試みるものであったかと思われる。この点については会場との質疑応答でも出た通り、画工と漱石の態度をどこで分け、画工に対する漱石の距離の取り方をどう捉えていくか、今

後検討する必要を感じた。他に会場から出された、なぜ画工は西洋画家なのかという観点も含めて、作品内におけるミレイ オフィーリア」への言及の位置づけについてなど、本文をさらに検討することで、前半の考察がより活かされるように思われた。

山本歩氏の「文章世界」の小説指導―田山花袋編『十一篇』に見るその傾向―」は、まず「文章世界」における選評から、花袋の小説指導に見られた評価軸の特徴が、「ローカルカラー」観察描写、「仄生」を描いた作品にあったという点を掘り起したうえで、田舎のさびしい町」で「都会にあくがれて」書き送る地方青年という投書家イメージが前景化され、その背景にコンプレックスに耐えつつ「田舎」の「仄生」に埋没すべきという、投書家たちを拘束するような意識が潜んでい

た点を指摘した。そして、こうした花袋の小説指導の特徴が投書家たちを規定し、抑圧していった状況を明らかにした。以上の論証は詳細な資料分析に基づいており説得力があった。質疑応答では「ローカルカラー」の定義や、選評執筆者への疑問、寂しさの実態、指導による投書作品の変化の有無など、多数の観点が呈示され、活発な議論となった。特に興味深かった点として、青年側のモチベーションに関して当時の文章修養主義をめぐる応答があったが、同時代における「文章世界」での花袋の小説指導の位置づけについて、他雑誌との相違や関わりなどをもっと聞いてみたく思った。

益田 拓

一〇二五年度春季大会の自由研究発表のうち、前半三本はいずれも明治期の研究であった。

平石岳氏 徳富蘆花 灰燼」と 西郷隆盛」は、主に上野公園の西郷隆盛像落成に関する言説に注目し、西郷」が同時代において英雄視されていたにも関わらず、国民新聞」上で発表された「灰燼」では民衆の生活感情に従って「福神様」や「疫病神」と様々に語られ、物語内の上田家もまた「義的な意味に止まることの無い世間の言説によって「村」に裁かれているという作品の特徴を浮き上がらせた。その上で「西郷」を英雄として利用することで読者を帝国主義的な「国民」へと教化

を進めることでこの点の両者の間隙を埋める可能性があるのではないだろうか。

山本歩氏 「文章世界」の小説指導——田山花袋編『二十一篇』に見るその傾向——は、「文章世界」における懸賞小説の傑作選である『二十一篇』に収められた小説とその選評の分析を通じて、作品の評価の傾向と、その功罪について言及する発表であった。氏はそれぞれに投稿された小説群を精緻に分析・分類し、その傾向を①「ローカルカラー」の表れた事象を②傍観的に「観察描写」し、③「人生」を描いたもの」とした上で、そういった評価に「コンプレックスに耐えつつ 田舎」の「人生」に埋没するべきという意識が潜在しているか」と、懸賞作家達を抑圧する「文章世界」の評価軸という構造を示唆する発表であった。会場か

することが目論まれた「国民新聞」に作品が発表されたことの意義を問い、西郷」を英雄として語ることで自体的恣意性を浮き彫りにする点に「灰燼」の批評性を見出した。論旨が明解で説得力のある発表であったが、物語内容と同時代言説との関係について疑問が残った。たとえば猛に「反逆者 西郷」に関連づけられて死んだ茂がお菊の死とともに恋愛の「美談」に仮構されてしまう」ことはどのように意味づけられるのだろうか。また会場からは、西郷を反逆者として利用した猛もまた最後に裁かれることに対する解釈を問う質問があった。

原田のぞみ氏 「罎枕」——オフェリヤの合掌を中心に——は、「罎枕」中にオフェリヤの合掌」とあるにも関わらず、ミレイの描いた「オフェリア」では両手を広げたオランズと呼ばれるキリうが、より「文章世界」の評価軸に沿うような傾向はなかったのかという質問があった。四〇年以降の自然主義的な文脈の評価軸が一貫したものではないことを踏まえれば、明治四三年の時点から事後的に選ばれた「傑作選」という視座に加え、明治四〇年を起点に選評されていった作品群という視座もまた可能であり、それぞれの状況に踏まえた上での比較検討によって議論は更なる広がりを見せるのではないだろうか。

スト教における祈りの所作が描かれているという表現上の齟齬を、創作的意図のある翻訳行為として解釈しなおした興味深い発表であった。キリスト教的な救いのイメージが仏教的な救いのイメージと絡み合っていること、そして、物語内で画工が「オフェリヤ」に抱く「苦」または「不愉快」なイメージが仏教的な「往生」に変換されることで、より「美的」な場面として描かれていると結論づけられた。しかし、ミレイの絵画のもつキリスト教的救いが、物語内で画工に「苦」または「不愉快」なものとして評価された理由が判然としなかったために、結論がやや並列的でまとまりに欠ける印象が残った。「一般的なキリスト教的救いのイメージ」と画工の個人的感情は容易に結びつけられるものではないが、翻訳主体としての漱石を起点として整理・分析

後半

橋本 正志

自由発表の四人目は、山田佳奈氏による「末幸治 ぎりぎりす」の「考察——背骨にしま」われた「かつての自分——」であった。山田氏は、先行研究に共通する「基盤」として、いずれも夫を通して妻の語りを解釈する点を指摘し、本作品を「整理」された妻の語りにより、妻自身が「成長」する物語と読み解いた。妻の夫への思いの変化を丁寧にとどりながら、その過程で妻が岡井先生を夫との「比較対象」として発見していくことに着目し、岡井先生の役割の大きさも指摘した。

会場からは、まず「成長」というキーワードについて質問が相次いだ。山田氏は回答の中で、「成長」を妻が語る

実質的な時間の中において読み取ることを確認したが、しだいに感情的になつていく妻の語りを「成長」との表現で捉えることができるかとの質問については、解釈の余地を残した。

詳細な分析に基づく読解の楽しさを味わえた一方で、最後の質問にもあつたように、作品末尾の「背骨にしま」われたとは具体的にどのような状況なのか、もう少し説明があればわかりやすかつたと感じた。ともあれ、ぎりぎりす」にはまだ細部にわたつて多くの解釈の可能性があることをあらためて発見させられた。

自由発表の最後は、杉岡歩美氏による「中島敦 甬島譚」考―病」と南洋」であつた。杉岡氏は、すでに中島の南洋もの作品に関する論者が多くあるが、今回は新たに「病」幸福」をキーワードに「甬島譚」三作品（幸福」

時系列に沿つて作品を読み解いた。そして「妻」の苛立ち↓不満↓批判↓別れ、という意識変化と捉え、それが整理され克明に語られていることから、妻の妻による妻のための語り」であると考察した。「背骨にしま」われたのは、かつての自分」であり、成長を語ることに、妻」は新たな道を歩もうとしていると論じ、その姿勢を尊いものだと考えたからこそ、題を「ぎりぎりす」にしたのでは、と結んだ。

会場からは、「妻のための語り」と捉えることで生じる矛盾点の指摘や、整理出来ているものを語る必要性への質問が上がった。発表者も引用した佐藤厚子氏の論には、断定的で歯切れ良い」口調につきまとう「不透明な割り切れなさ」に「自ら戸惑いを覚えるからこそ、彼女は語り続ける」とあり、完成された語り」と読む発表者の見解と

夫婦」鶏」を読む意欲的な内容であつた。

戦前日本の南洋群島統治においては、病」を予防ないし治療することが島民の「幸福」実現に不可欠とされ、当時の民族「俗」学者による研究の価値も、島民の「幸福」追求と関わって見出されていたことなどが指摘された。

その上で、「甬島譚」三作品の語りの方などに着目し、中島の作品化の過程も踏まえて、当時の「南洋」観を相対化する批評的視座を見出していこうとする積極的な姿勢を感じた。

会場からは、とりわけ「鶏」に関して質問が集中した。素材である土方久功の文章との温度差から見えてくるものがないか、また「病」は登場人物像を構成する一要素に過ぎないのでは、という指摘も上がった。質問者との丁寧なやりとりの中で、「南洋」前の作

品における「病」幸福」の描かれ方との比較から見えるものもあるように触発されたが、最後に出た質問に関連して、今回の横断的な切り口による収穫をどのように個々の作品全体の読みにつなげていくのかといった悩ましい課題も浮かび上がった。これらの検討も含めて、今後の杉岡氏の研究のさらなる深まりに期待したい。

後半

水川 布美子

山田佳奈氏「天宰治「ぎりぎりす」の考察―背骨にしま」われた「自分の自分」―」は、先行研究の共通基盤が「突」を通して妻の語りを解釈する点にあると分析し、「妻」の視点で

正反対である。今回触れられなかつた「妻」の家族や「但馬さん」への言及、会長が示唆した、当時の画家が置かれていた位置など、さらなる検証と広い視野に立った研究に期待したい。

杉岡歩美氏「中島敦 甬島譚」考―病」と南洋」は、多彩かつ膨大な資料を引用し、戦時下の南洋庁が医療と教育で、島民の原始的な生活を改善するという「島民教化」を計っていた事実を確認した上で、「甬島譚」三篇における「病」を考察した。その教化が為政者たちの幻想に過ぎず、南洋研究者たちは島民の固有文化を把握した上で統治することが望ましい」と主張、中島は彼等に近い立場をとつたと推測した。しかし、現代の南洋を舞台にした「鶏」で、民俗学者の「私」がマルクóp老人を不可知の他者として描くことで、その限界を示していると指摘

し、未開―文明、不衛生―衛生のような二項対立を問い直す展望を示した。

「幸福」の下僕における「病」は、初めに資料があり本文が後「アクロパティック」等の指摘や評価が会場から上がった。「鶏」のマルクóp老人の人物造形に関する質問で、土方久功の描く「ギラメスブツ爺さん」或いは「アマラエル老人」との相違についての回答では、肝心の「病」が置き去りにされている印象を受けた。それでもなお、緻密な調査は圧巻であり、刺激的な発表だと感じた。

書評

青木 亮人 著

『その眼、俳人につき』 正岡子規、高浜虚子から平成まで

加藤 美奈子

俳誌「來室」「円虹」連載からの抜萃、また各俳誌等から「稿をまとめた一冊で、近現代の俳人・句作を一望しながら情緒豊かな随想として各章がまとまりをなしている。著者が「貫して追い続けたのは俳句独特のクセ」であるが、研究業界で近代俳句は無人の荒野に等しい（あとがき）という。多く、共感するが、有季定型は小説や詩、短歌とも異なる歪みや余白を発生させる」（一〇頁）とあるように、俳句とそれ以外、という括りで一貫している。

其角堂永機・三森幹雄ら 俳諧宗匠」は、短歌における高崎正風ら 御歌所」派の歌人のような存在なのだろう。幹雄は官職 俳諧教導職」に就き、芭蕉を祖神と崇め、大倫の道へ導く立派

な文芸」（九六頁）を主張したという。

与謝野鉄幹の「亡国の音」（明治一七年）の檄の方に寧ろ近い時代の主張が感ぜられ、なぜ、私たちは三森幹雄を否定せねばならないのだろうか」（九七頁）という問いは妥当である。明治三年の「都新聞」の俳人人気投票で、宗匠達が無節制の上位を占め、子規は三七位という事実は、署名宗匠を名指して否定」（四八頁）した子規の俳論について印象を新たにさせられる。また、宗匠たちの肉筆」についての挿話が印象に残る。子規たちの短冊や軸は日々の暮らしになじまず、句に力がありすぎ「不安」になるが、月並」の短冊は生活の平凡さを脅かさず「暮らしの中で魅力を放つ」という。句の活字で見たのみでは分からない「魅力と、生の実

感」（六三頁）が率直に語られている。子規の生涯を複数の視点から活写する章、気儘」な碧梧桐・虚子への執着「愛」（六一頁）を描いた「愛と執着、または起風器」、子規の「写生」以後、日本の韻文の中で著しく衰退した感覚は「うつろひ」ではないか」（三四頁）と考察した「うつろひの消滅」などが特に興味深い。

最後、関悦史に引かれた「補助線」が、同世代の「サブカル」好きの間でのみ流通する「平成のリアリティ」（二八頁）に過ぎないことが惜しまれた。現代短歌は、電線、踏切の遮断機」（一九頁）の類にとっくにまみれてしまっている。有季定型」は、柵」ではないのか。和歌・短歌については、著者がどう捉えているか、切実に知りたくなった。

（一〇）三年九月三〇日 邑書林
一三六頁 一九〇〇円十税

書評

尾西 康充 著

『戦争を描くリアリズム』 石川達三・丹羽文雄・田村泰次郎を中心に』

中谷 いずみ

本書は、石川達三・丹羽文雄・田村泰次郎という三人の作家がどのように戦争を描いたかを論じたものである。著者はこの三人を、社会問題への関心を持ちつつ大衆文学作家とは異なるかたちで広範な読者を獲得した作家たちと位置づけ、プロレタリア文学運動の崩壊後にその系譜を継いだ存在と見なす。そして彼らの戦時期の作品や戦争を描いた作品を取り上げ、分析を行っている。

興味深いのは、取り上げた作品の背景をなす情報が、時に著者ならではの調査によって提示されることである。例えば石川達三「翳茫」の分析では、著者がブラジルのサンパウロ大学に客員教授として招かれた経験をいかすか

たちで日系コロニアの文学受容などが論じられており、一つのテクストをめぐる文脈や受容の諸位相に気づかせてくれる。

また題名にもあげられている「戦争」と「リアリズム」の関係は、重要なテーマといえよう。著者は例えば石川達三「聖きてある兵隊」を「リアリズムの伝統的な手法」を用いて「内側の視点から追究しようとした」作品と見なす。そして小林多喜二と比較しつつ、何をクローズアップし、何をデフォルメするのは、本来「愈想」にもとづいて選択されるべき」なのに、石川達三にはそれを支える「愈想」が欠如していたと指摘するのである。著者がプロレタリア文学と大衆文学の結節

点と見なす作家の問題がここに凝縮されているともいえよう。

ただ気になるのは「リアリズム」と「愈想」——という関係を立ち上げることで、アルチュセールのいう「デオロギー」の問題が抜け落ちてしまうのではないかとということである。人びとと世界との「生きられた」関係や、その想像上の関係の反映を「デオロギー」と捉えるならば「アルチュセールのマルクスのために」（河野健二ほか訳、平凡社、一九九四年）、小説もまた「デオロギー」の物質的な実践に外ならない。プロレタリア文学と大衆文学の結節点にいた作家たちによる戦争を描いた作品は、支配的イデオロギーとどのように切り結び、どのような想像上の関係によって読者に呼びかけたのか。本書に続くテーマとして、ぜひ論じてほしい。

（一〇）一四年 二月 一五日 大月書店
二五二頁 二八〇〇円十税

書評

山本 昭宏 著

櫻と日本人 ヒロシマ・ゴジラ・フクシマ

雨宮 幸明

本書は日本の核言説と文化的表象を丹念に研究してきた著者の新刊である。著者の前著『櫻エネルギー言説の戦後史 1945-1960』（〇二二年六月 人文書院）は、原子爆弾に象徴される「原爆の記憶」と原子力発電における「原子力の夢」とをそれぞれに主導した知識人の言説がどのように社会に影響を与えたか、戦後占領期から一九六〇年まで複雑な経緯を検証するものであった。単なる言説史に留まらない小説や文化との関係にも注目し、戦後の原子力言説が平和利用と核廃絶の間で現在の状況の基礎を築いた時代が豊富な資料と共に紹介された。

本書は一部前著と重なる内容もあるが、異なる点が二つある。一つ目は前著では主に知識人の言説が分析対象であったが、本書では一貫して大衆文化

であるサブカルチャー、特にマンガ文化における社会の核意識の表象分析に重点が置かれている。二つ目は戦後占領期から三・一一以降の福島原発事故までを含めた現在まで、研究対象の分析期間を拡大していることである。上記の一点により著者は原子力の平和利用と核廃絶の対立言説が定着するまでを検証した前著の探究をさらに現代の大衆文化分析まで深めている。

全五章からなるその内容を紹介すると、第一章では原爆投下の惨禍から占領期の原爆被害と放射能汚染の情報秘匿、そしてそれらが十分に共有されていなかった日本の独立初期における核表象がマンガ等の分析を通して明らかにされる。第一章では核の恐怖が核戦争という言葉で語られる一方で原子力の平和利用が高速増殖炉により実用化

される一九六〇年代が分析される。第

三章では核戦争による人類滅亡や終末が定形化され、核汚染の認識と共に原発運動が生まれる一九七〇年代が対象となる。第四章の一九八〇年代ではチェルノブイリ原発事故を主軸に、核汚染の恐怖や原発事故の悲惨な光景が既に見世物のような刺激としてしか消費されない様子が論じられる。最後の第五章において、一九九〇年代から三・一一以降の核と原発の現在の問題が示される。

著者の大衆文化分析による探求は最後に一つの問いかけに結実する。それは原子力の平和利用と核廃絶という出口のない言説的な対立が、原発という日常を目の前に、無関心な「安定した対立構造」を再生産していく現状への告発となっている。一人でも多くの読者に著者のこの問いが届くことを希望したい。

（〇一五年一月二五日 中央公論新社 二八八頁 八八〇円＋税）

書評

倉敷市編

宥敷市蔵 薄田泣菫宛書簡集
宥敷市蔵 薄田泣菫宛書簡集

作家篇
詩歌人篇

細川 正義

倉敷市が薄田泣菫のご遺族から寄贈を受けた資料約一、七〇〇点をもとに倉敷市では「薄田泣菫文庫」と名付けて管理保管しているが、この度、作家たちの薄田泣菫宛の書簡、及び泣菫所有の書簡を「参考書簡」として、一七八通を収録し、「解説」を加えてまとめた『宥敷市蔵 薄田泣菫宛書簡集 作家篇』と、発信人が詩歌人であるものを中心に一八七通を収録し、「解説」を加えてまとめた『宥敷市蔵 薄田泣菫宛書簡集 詩歌人篇』が上梓された。調査研究に当たったのは倉敷市から委嘱された『薄田泣菫文庫調査研究プロジェクトチーム』で、浦西和彦、掛野剛史、片山宏行、加藤美奈子、庄司達也、西山康一、荒井真理亜、三宅昭三の各氏によって構成された。この度の刊行はこのプロジェクトチームのメンバーが中心になってなされた。

薄田泣菫は明治一〇年五月一九日に岡山県浅口郡大江連島村（現在の倉敷市連島町）で生まれ、昭和二〇年一月九日、故郷連島にて六八歳で歿している。生前は明治三二年に第二詩集『霽集』を刊行し、その後『初春』『百羊宮』などの詩集を出して、明治後期の詩壇を代表する活躍をした。明治三三年一〇月に金尾文淵堂が創刊した『芥天地』の編集名義人になり、平尾不孤等とともに編集に当たっている。『芥天地』は明治三六年一月まで全二五号を発行した。この頃は、詩人泣菫としても充実しており、『百羊宮』はその代表である。大正元年八月、三五歳の時に大阪毎日新聞社に入社し、以後は編集者として敏腕を振るっている。大正四年学芸部長菊池幽芳のもとで副部長に就き、大正八年幽芳の引退とともにない部長になった。大正六年頃から

パーキンソン氏症候群を発病し、大正二年休職、昭和三年五月に退職している。休職を機に、『泣菫詩集』（大正一四年）、『泣菫文集』（大正一五年）など相次いで刊行している。

このような泣菫の人生が反映して、二書に収録された書簡も、詩人泣菫として、『芥天地』編集人として、大阪毎日新聞社学芸部の担当者としてなど、書簡の発信時期によって区分けする事が出来る。与謝野寛が若き泣菫に親近感を示し、明治三三年一月八日付で、『明星』に寄稿を依頼した書簡、島崎藤村が明治三五年一月一日付で『芥天地』へ『霽』の原稿を送付したことを告げた書簡、上田敏が泣菫に対して泣菫の芸術観に自分と共通するものを見出したことを告げた書簡など、明治期に泣菫が詩人として早くから頭角を現していたこと、金尾文淵堂発行の『芥天地』では、詩から散文まで幅広く目配りしながら編集人として活躍していたこと、上田敏、蒲原有明ら明治を代表する詩人たちと綿密に関わっていたことなどが、よく整理された書

簡の収録と作家別の的確な解説で簡明に理解できるように仕上がっている。

その中でも大阪毎日新聞社の文芸部に勤務する中で、芥川龍之介を社員として採用したこと、菊池寛の採用に関してや、谷崎潤一郎の新聞掲載と前借依頼を巡ってなど、実に誠実かつ迅速に対応して小説家たちから篤く信頼され、大正期の文壇にかなり影響力を發揮していたことが髣髴される。

芥川からの書簡は四五通収録されている。岩波書店の「芥川龍之介全集」では泣菫宛の書簡は五〇通収録されているので、本書にはその大半が収録されていることになるが、全集未収録のもの、全集とは書簡の発信日付に差異があるものがいくつも見られ、薄田泣菫文庫「所収の書簡と芥川全集との綿密な照合によって芥川研究の今後に貴重な資料となりうるであろう。新聞人薄田泣菫」と題した掛野剛史氏の解説に、「毎日新聞七十年史」が引用され、大正二年の新聞発行部数では、東京日日新聞と合併した毎日新聞が四三万になり、朝日新聞発行部数約三三万三千

部をはるかに超えていることが示されており、大正八年に芥川が毎日新聞社に社員として迎えられたことの特記すべき出来事であったことと、それを実現した泣菫の新聞人としての先見性と辣腕ぶりがうかがえるところである。

芥川が毎日新聞社に入社する前に、毎日新聞社としては夏目漱石を擁する朝日新聞社に匹敵する文人として森鷗外に執筆依頼し、鷗外は大正五年一月一日から史伝物の「麗江拙齋」伊澤蘭軒」と書き継ぎ「罪條霞亭」へと続けられていた。しかし、新聞連載としては、史伝物は馴染みにくく読者から不満の投書が寄せられるようになった。そうした中で芥川龍之介と菊池寛を投入して「起死回生を図ろうとしたのが泣菫のジャーナリスティックな先見性であった」と片山宏行氏は解説している。作家としては「鼻」「芋粥」などで知られ始めたばかりの芥川龍之介を社友として迎え、翌年に社員として遇するという決断はまさに泣菫の新聞人としての「先見性」であったと言える。大正一〇年五月三一日付で中国・長沙

紹介

今西幹 一企画

佐藤裕子・増田裕美子・増満圭子・山口直孝編
『甥っちゃん』事典』

信時 哲郎

二松学舎大学学長であった故・今西幹一のアイディアに基づいて編まれた夏目漱石「甥っちゃん」に関する事典。I部 作中用語篇では「うんでれがん」「椽鼻」「紅梅焼」など一七八項目、II部の関連項目篇では漱石の生い立ちや家族、交友関係、著作物、モデルとなった人物など九〇項目がピックアップされている。III部のコラム篇では、漫画化や映画化について、児童文学や教材としての「甥っちゃん」方言、研究史などの一六編が収められている。「はじめに」に「作品に初めて触れる児童から日本近代文学の研究者まで、幅広い読み手を想定し、平易な叙述を基本としながら、専門性にも留意し、それぞれの読者の興味に応えられるものとなるよう、本書は工夫されている」とあるように、歴代の「甥っちゃん」単行本の表紙や、映画化された際の「甥っちゃん」のチラシやリーフレットがカラーで紹介されるなど、漱石研究者でなくとも十分に楽しめる本となっている。

(一〇一四年二月二〇日 勉誠出版 二八八頁 四五〇〇円十税)

紹介

鳥井 正晴 著

句あるべくも 漱石俳句撰』

前田 貞昭

円覚寺参禅の際、漱石が止宿した塔頭帰源院には「鎌倉漱石の會」事務局が置かれ、会報「門」が毎年春秋の二回発行されている。本書は、その第七号（平成二五年七月）から第二号（平成二五年七月）まで全二二回に亘って連載されたものを初出とする。漱石の俳句には「漱石の直截の声」が、果敢なく響いている」と鳥井氏は言う。毎回、選句されたのは二句、一句につきおよそ八〇〇字という限られた紙幅だが、関連する漱石句にも言及しつつ、漱石の「形而上学」(禅味)を漱石文学のネットワークの中に捉えたエッセイである。装帧・版面設計は、上野かおる氏。判型はB5判。糸綴じ・角背の上製本で、潇洒なクリーム色のジャケットをかける。漢字・仮名を同じ線質とする丸ゴシック体を採用して、柔らかい印象の版面になっている。引用句の書体や見開きの体裁にも工夫が凝らされた、内容・体裁ともに品位のある一冊。

(一〇一四年二月二四日 和泉書院 四九頁 二八〇〇円十税)

二〇一六年度 関西支部春季大会 研究発表募集のお知らせ

日本近代文学会関西支部では、二〇一六年度春季大会における自由研究発表を募集いたします。支部会員の皆さまの積極的なご応募をお待ち申し上げます。

日時・会場 二〇一六年六月四日（土） 会場・花園大学

※詳細は決定次第、関西支部HPでお知らせいたします。

募集人数 若干名

応募締切 二〇一六年二月一九日（金）必着

応募要領 発表題目および六〇〇字程度の要旨を封書でお送りください。必ず連絡先（電話番号・メールアドレス等）も明記してください。

発表時間は三〇分程度です。

採否については、運営委員会で決定し次第お知らせいたします。

発表に関してご不明の点は事務局までおたずねください。

送付先 〒631-8502 奈良市山陵町二五〇〇 奈良大学 木田隆文研究室内 日本近代文学会関西支部事務局

事務局便り

○献本のお願い

本会報では、支部会員の皆様が刊行された書籍を対象とする、書評欄を設置しております。事務局では、書評を希望される書籍を随時受け付けております。左記の要領でぜひお送りください。

対象となる書籍：支部会員の学術的な刊行物で、単著、あるいは支部会員が関わって刊行された書籍。

送付先：関西支部事務局

※なお、書評欄への掲載の採否および書評者の人選については、関西支部運営委員会にご一任ください。

○維持会費納入のお願い

維持会費の納入がたいへん少ない状況です。ご協力のほど、何卒よろしく願います。

○関西支部二〇一五年度役員

浅子逸男 支部長） 天野勝重 天野知幸 岡村知子 木田隆文 委員長） 斎藤理生 坂堅太 重松恵美 須田千里
関肇 高木彬 高橋幸平 瀧本和成 戸塚麻子 中谷いずみ 西山康一 信時哲郎 福岡弘彬 ホルカ・イリナ
前田貞昭 山崎正純 山田哲久 山本昭宏 山本欣司 和田崇

○日本近代文学会関西支部事務局 〒631-8502 奈良市山陵町一五〇〇 奈良大学 木田隆文研究室内